

フランスの歴史・地理教科書と国土教育

—「考え、表現すること」「空間で捉えること」を教えるフランスの教育—



国土学アナリスト
元 国土技術研究センター
首席研究員
森田 康夫

1 フランスでは「哲学」が必修科目

「認識を欠いた場合、解釈できるか?」「芸術家はその作品の主人なのか?」「科学は事実の証明に限られるのか?」「労働は自意識を持つことを容認するのか?」「我々は幸せになるために生きているのか?」「政治に関心を持たずに道徳的にふるまうことはできるか?」……。これらはいずれもフランスのリセ (Lycée: 高校) 修了認証国家試験「バカロレア (baccalauréat)」の「哲学」の問題である。

バカロレアは、高等教育機関に入学するための資格でもあり、1808年にナポレオン・ボナパルトによって導入され、現在では18歳に達したフランス国民の2/3がこれを取得している。

バカロレアは、大学やグランゼコール (grandes écoles: 高度専門職養成機関) など高等教育進学志望者向けの「一般バカロレア」と、就職志望者向けの「技術バカロレア」及び「職業バカロレア」の3種類に区分され、一般バカロレアは科学系 (scientifique: 通称S)、人文系 (littéraire: 通称L)、経済・社会系 (économique et sociale: 通称ES) と分野別に分かれている。これらのうち科学系バカロレア取得者は、全ての分野の職業に就けるとされており、グランゼコール進学志望者などの優等生は、理系志望でなくても科学系を取得する傾向にある。

このバカロレアに関してフランス国民の注目を集めるのが、例年、第1日目の午前中に行われる哲学の試験である。フランスでは、リセの最終学年において哲学の授業が必修科目になり、人文系の生徒は週8時間、経済・社会系は週4時間、科学系は週3時間、技術系・職業系でも週2時間の受講が義務付けられる。この哲学の授業は、初等教育以降の国語 (フランス語) の授業を引き継いで、論理的に思考することを徹底的に教える場であり、フランスでは学校教育の総仕上げとして位置づけられている。その成果がバカロレアで問われるのだ。哲学の試験は、バカロレアを受ける者は全員もれなく受験しなければならず、試験 (論述式、4時間) では、知識だけでなく明晰な判断力と

論理展開の能力、そしてそれを的確に表現する能力が求められる。

日本で哲学を学ぶといえば、哲学者の名前と思想の要約を暗記し、それをマークシートで答えることになるだろうが (少なくとも私が30年前に大学受験で選択した「倫理・社会」はそうだった)、フランスでは哲学は学ぶものではなく、「哲学することを学ぶ」のだ。バカロレアでは、哲学史上の議論を踏まえながら「自分の議論」を展開することになる。

ちなみに、ここまで述べたことは、哲学の試験だけでなく、国語 (フランス語)、外国語、歴史・地理などの他の科目においても当てはまる。つまり、フランスの教育において重要なことは、自分で考えること、考えを論理的に相手に伝えられること、そのとき動員できる知識を身につけることなのである。

フランスには、「フランス的例外 (l'exception française)」という言葉がある。多くのフランス人は祖国を強く愛し、フランスが他国に対して「文化的な優越性」を持つと信じているが、この「フランス的例外」は、哲学をはじめとする学校教育からも大きな影響を受けているようだ。

2015年バカロレア「哲学」の試験問題

以下の3つの主題のうち、1つを選択して論述せよ。

人文系 (Bac L)	科学系 (Bac S)
テーマ1: あらゆる生物を尊重することは倫理的な義務であるか? (Respecter tout être vivant, est-ce un devoir moral ?)	テーマ1: どんな芸術作品も何らかの意味を持つか? (Une oeuvre d'art a-t-elle toujours un sens ?)
テーマ2: 人は自らの過去の所産なのか? (Suis-je ce que mon passé a fait de moi ?)	テーマ2: 政治は真実の要求を免れ得るか? (La politique échappe-t-elle à une exigence de vérité ?)
テーマ3: 以下のトクヴィル『アメリカのデモクラシー』の抜粋を説明せよ。(略) (explication de texte de Tocqueville extrait de De la démocratie en Amérique)	テーマ3: 以下のケロン『予言について』の抜粋を説明せよ。(略) (explication de texte de Cicéron extrait de De la divination)

2015年6月17日 試験 (論述式、4時間)

図1 バカロレア「哲学」の試験問題

表-1 一般バカロレアの試験区分と受験科目

バカロレア 受験学年 ↓	一般バカロレア (Baccalauréat Général)		
	人文系 (littéraire ; 通称L)	経済・社会系 (économique et social ; 通称ES)	科学系 (scientifique ; 通称S)
第1級 première (高校2年)	<ul style="list-style-type: none"> ■フランス語(筆記4時間+口述20分) [配点係数3+2] ■科学(筆記1時間30分) [配点係数2] ■グループ討議(3人で30分) [配点係数2] 	<ul style="list-style-type: none"> ■フランス語(筆記4時間+口述20分) [配点係数2+2] ■科学(筆記1時間30分) [配点係数2] ■グループ討議(3人で30分) [配点係数2] 	<ul style="list-style-type: none"> ■フランス語(筆記4時間+口述20分) [配点係数2+2] ■グループ討議(3人で30分) [配点係数2]
最終級 terminale (高校3年)	<p>必修科目</p> <ul style="list-style-type: none"> ■文学(筆記2時間) [配点係数4] ■歴史・地理(筆記4時間) [配点係数4] ■現代外国語1(筆記3時間+口述20分) [配点係数4] ■現代外国語2(地域語を含む)(筆記3時間+口述20分) [配点係数4] ■外国語文学(口述10分) [配点係数1] ■哲学(筆記4時間) [配点係数7] ■体育・スポーツ(平常点) [配点係数2] <p>専門科目(選択)</p> <ul style="list-style-type: none"> □ラテン語(筆記3時間) [配点係数4] □ギリシャ語(筆記3時間) [配点係数4] □現代外国語1または2の配点拡大 [配点係数+4] □現代外国語3(地域語を含む)(口述20分) [配点係数4] □数学(筆記3時間) [配点係数4] □現代世界の課題(口述20分) [配点係数4] □芸術・音楽(7つの詳細科目別)(筆記3時間30分+実技または口述30分) [配点係数3+3] □体育・スポーツ(平常点) [配点係数2] <p>自由選択(オプション)科目</p> <ul style="list-style-type: none"> ※現代外国語3、フランス語手話、ラテン語、ギリシャ語、体育・スポーツ、芸術、音楽 [配点係数2または3] 	<p>必修科目</p> <ul style="list-style-type: none"> ■歴史・地理(筆記4時間) [配点係数5] ■数学(筆記3時間) [配点係数5] ■経済・社会学(筆記4時間) [配点係数7] ■現代外国語1(筆記3時間+口述20分) [配点係数3] ■現代外国語2(地域語を含む)(筆記2時間+口述20分) [配点係数2] ■哲学(筆記4時間) [配点係数4] ■体育・スポーツ(平常点) [配点係数2] <p>専門科目(選択)</p> <ul style="list-style-type: none"> □経済学(筆記1時間) [配点係数2] □数学の配点拡大 [配点係数+2] □経済・社会学(筆記1時間) [配点係数2] □体育・スポーツ(平常点) [配点係数2] <p>自由選択(オプション)科目</p> <ul style="list-style-type: none"> ※現代外国語3、フランス語手話、ラテン語、ギリシャ語、体育・スポーツ、芸術、音楽 [配点係数2または3] 	<p>必修科目</p> <ul style="list-style-type: none"> ■歴史・地理(筆記3時間) [配点係数3] ■数学(筆記4時間) [配点係数7] ■物理・化学(筆記3時間30分+実技1時間) [配点係数6] ●生命・地球科学(筆記3時間30分+実技1時間) [配点係数6]または ●生態学・農業と地域(筆記3時間30分+実技1時間30分) [配点係数7]または ●エンジニア総合科学(筆記4時間+口述20分) [配点係数6] <p>□現代外国語1(筆記3時間+口述20分) [配点係数3]</p> <p>■現代外国語2(地域語を含む)(筆記2時間+口述20分) [配点係数2]</p> <p>■哲学(筆記4時間) [配点係数3]</p> <p>■体育・スポーツ(平常点) [配点係数2]</p> <p>専門科目(選択)</p> <ul style="list-style-type: none"> □数学、物理・化学または生命・地球科学の配点拡大 [配点係数+2] □科学情報・数値処理(口述20分) [配点係数2] □生態学・農業と地域(口述30分) [配点係数2] □体育・スポーツ(平常点) [配点係数2] <p>自由選択(オプション)科目</p> <ul style="list-style-type: none"> □現代外国語3、フランス語手話、ラテン語、ギリシャ語、体育・スポーツ、芸術、音楽、乗馬、社会・文化的慣習 [配点係数2]
出典	http://eduscol.education.fr/cid58534/serie-l.html	http://eduscol.education.fr/cid58532/serie-es.html	http://eduscol.education.fr/cid58536/serie-s.html

※バカロレア (baccalauréat) には、一般バカロレア (bac général)、技術バカロレア (bac technologique)、職業バカロレア (bac professionnel) がある。
 ※2013年のバカロレアの受験割合は、bac général 49%、bac technologique 21%、bac professionnel 30%。
 ※2013年のバカロレアの取得率(≒合格率)は、bac général 91.9%、bac technologique 86.4%、bac professionnel 78.5%。
 ※バカロレアの試験は各教科20点満点で採点され、係数処理等がなされた後、全体平均10点以上で合格となる。また、成績優秀者には可否だけでなく、獲得平均点数に応じて「秀 (très bien) (平均16点以上)」、「優 (bien) (平均点14点以上16点未満)」、「良 (assez bien) (平均12点以上14点未満)」の成績評価 (mention) が与えられる。なお、不合格の場合でも平均点数が8点以上の場合には追試験を受けることができるが、その場合は成績評価は与えられない。

2 フランスの教育制度

2.1 学校制度

フランスの教育システムは、初等教育課程としてエコール・エレメンタール (Ecole élémentaire : 小学校)、中等教育前期課程としてコレージュ (Collège : 中学校)、中等教育後期課程としてリセ、高等教育として大学、グランゼコール、高等専門学校などがあり、義務教育は6歳~16歳(初等教育準備科より中等教育前期課程終了)まで、学年制度は小・中・高で5・4・3制となっている。

初等教育のエコール・エレメンタールは6歳のCP (cours préparatoire : 準備級) に始まり、CE1 (cours élémentaire niveaux 1 : 初級第1学年)、CE2 (初級第2学年)、CM1 (cours moyen niveaux 1 : 中級第1学年)、CM2 (中級第2学年) と進み、卒業後は中等教育の前期課程コレージュに進学する。コレージュでは最初の1年を第6級 (6ème) と称し、進級するごとに数字が減って、第3級 (3ème) で修了となる。コレージュの前半2年間は共通課程であるが、後半2年間は選択課程となり、進学コースと職業教育準備コースに分かれることとなる。ただし、日本とは異なり、各学年で履修すべき課程を修了したと認定された者だけが進級できる制度なので、初等教育課

程・中等教育前期課程において落第する生徒も少なくない。

コレージュを卒業した生徒は、希望によって中等教育の後期課程であるリセに進学する。リセには高等教育進学を目的とした学校と、職業的専門知識を習得することを目的とした学校があり、第2級 (2nde)、第1級 (1ère)、最終級 (Terminale) の順で進級する。リセの最終級が終了する毎年6月中旬には、中等教育の修了を証明するとともに、大学などの高等教育機関への入学資格を得るための統一国家試験「バカロレア」を受験する。

表-2 フランスの学校と学年の呼称

学校	学年	日本の相当学年
中等教育後期 リセ Lycée	最終学年 Terminale	(高校第3学年)
	第1級 1ère (Première)	(高校第2学年)
	第2級 2nde (Seconde)	(高校第1学年)
中等教育前期 コレージュ Collège	第3級 3ème (Troisième)	(中学校第3学年)
	第4級 4ème (Quatrième)	(中学校第2学年)
	第5級 5ème (Cinquième)	(中学校第1学年)
	第6級 6ème (Sixième)	(小学校第6学年)
初等教育 エコール・エレメン タール Ecole élémentaire	中級第2学年 (CM2)	(小学校第5学年)
	中級第1学年 (CM1)	(小学校第4学年)
	初級第2学年 (CE2)	(小学校第3学年)
	初級第1学年 (CE1)	(小学校第2学年)
	準備級 (CP)	(小学校第1学年)

フランスの高等教育は、大学とグランゼコールの二元性をとっており、大学は教養（リベラル・アーツ）を深めるための場として位置づけられている。フランスでは基本的にバカロレアを取得したものが、バカロレアの受験科目によって、自分の行きたい大学（フランスの大学のほとんどは国立大学）の学部に進学するという仕組みであるため、大学への入学は比較的容易であるが、大学入学後の進級は厳しい。

一方、グランゼコールは、行政・技術・ビジネス分野の指導者となるエリートを養成するための機関であり、国立行政学院（École nationale d'administration：通称「エナ」）、エコール・ポリテクニク（École polytechnique）、パリ国立高等鉱業学校（École nationale supérieure des mines de Paris）、国立土木学校（École nationale des ponts et chaussées）などがある。グランゼコールに入学すると、国家公務員として処遇され、学生であっても給与が支給されるが、その前提として学校ごとに非常に厳しい入学試験が課せられているため、受験者はバカロレア取得後2年間グランゼコール準備学級で猛勉強をしなければならない。ちなみに、フランス最初のグランゼコールは国立土木学校であり、1747年にルイ15世の勅令によって、国家建設に不可欠な土木・建築領域におけるテクノクラート養成を目的として創立された。

2.2 教育行政

フランスの教育行政は中央集権的であり、教育分野における国の果たす役割は極めて大きい。初等・中等教育についてみると、国民教育省（正式名称：国民教育・高等教育・研究省：Ministère de l'Éducation nationale, de l'Enseignement supérieur et de la Recherche）は、学校の管理運営に対する指導・監督、教育課程の基準である学習指導要領（programme）の策定、修了証・職業免状交付の条件の設定、教員の採用と配置について権限を有しており、一方、地方自治体の権限は学校の設置・維持等に限定される。地方自治体の各段階（地域圏、県、市町村）には、国の出先機関が置かれ、国民教育省からの命令を受け、それぞれ教育行政の遂行に当たっている。

これは、1789年の革命に起源を持つフランス共和国の国是「ライシテ（laïcité）＝政教分原則」と密接に関連している。フランスは「カトリックの長女」を自認するほどで、かつてフランスの教室にはカトリックの十字架が掲げられていたが、革命から一世紀を経てようやく取り除かれたという歴史を持つ。義務教育を最初に法定化した1881-82年のジュール・フェリー（Jules Ferry）法は、共和制の柱として教育を位置

づけ、教育を市民の権利とするとともに、初等公立学校の現場から宗教教育を排除した。すべての国民に対して、平等で非宗教的な教育機会を担保するために、国が直接、教育内容や制度を管理することとなった。1946年憲法前文では「すべての段階での無償かつライック（非宗教的）な公教育の組織化は、国の責務である」と謳われており、就学前教育（幼稚園）から大学まで公教育は無償である。

2.3 学習指導要領と教科書制度

フランスには、わが国と同様に、全国的な教育課程の基準として、国の定める学習指導要領（programme）があり、教科書はこの学習指導要領に則って編集・発行されている。しかし、わが国のような教科書検定制度はなく、教科書の内容構成自体は民間の教育出版社にまかされている（出版社の教科書発行の自由）。また、教員には教育方法の自由が保障されていることから、教科書は学校ごとに教員（団）によって選択されており（教科書選択の自由）、さらに各教員は教科書を使わなくてもよいという自由を有している（教科書使用の自由）。このため、複数教科書の使用、コピーの配布、資料集や練習問題ノートとしての活用、未使用など、教科書使用の実態はきわめて多様である。

フランスの初等・中等教育では、一般的に教科書は無償・貸与制で、教科書は（複数種類の教科書が）教室に備え付けられており、使い終わった教科書が生徒の家庭に残ることはない。

3 中学(Collège)・高校(Lycée)の歴史・地理教育の特徴

第3章～第5章では、インフラストラクチャー（infrastructure）と国土教育に関係の深い教科目である歴史（histoire）と地理（géographie）を取り上げ、コレーージュとリセの学習指導要領、およびフランスの最大手教育出版社Hachette社が発行する歴史・地理教科書を通して、フランスの歴史・地理教育の特徴（第3章）、地理教科書における国土・インフラ教育の内容（第4章）、地理教科書に描かれている日本のすがた（第5章）について整理する。なお、Hachette社の歴史・地理教科書は、A4版（grand format）またはB5版（compact format）の全ページカラー印刷仕様で、写真や図などの資料が豊富に取り入れられている。

表-3 歴史・地理の学習指導要領に位置づけられている学習テーマ（コレッジ＆リゼ）

		歴史 Histoire	地理 Géographie
科学系 (scientifique; S)	最終級 Terminale 【選択科目】	テーマ1)過去の社会のレポート(歴史的文書:第二次世界大戦の記録、アルジェリア戦争の記録)〈4-5時間〉 テーマ2)1945年以降の世界における大国と紛争(1945年以降のアメリカと世界、1949年以降の中国と世界、中東戦争などの紛争)〈14-15時間〉 テーマ3)世界における政府の規模(1946年以降のフランス統治、マーストリヒト条約以降のヨーロッパ統治、1975年のG6サミット以降の世界経済統治)〈11-12時間〉	【国際化と地理的な力学】 テーマ1)複雑な世界の読解の鍵(地図・図表)〈4-5時間〉 テーマ2)国際化の原動力(グローバル製品、移動性、資金、港湾・海上交通)〈8-9時間〉 テーマ3)大陸規模の地理的な力学(アメリカ大陸:緊張と地域統合の側面、アメリカ合衆国とブラジル:世界的役割と領土力学、サハラ:資源と矛盾、アフリカ大陸:開発と国際化、東南アジア:人口と成長の挑戦、日本と中国:地域内競争と世界的野心)〈17-18時間〉
	第1級 1ère (Première)	テーマ1)19世紀中頃以降の経済成長と国際化〈6-7時間〉 テーマ2)20世紀の戦争と全体主義体制(第一次・第二次世界大戦、ソビエト・ファシスト・ナチ、冷戦)〈17-18時間〉 テーマ3)20世紀移民の課題に直面するフランス共和国(第三共和政、レジスタンス、第五共和政、労働力人口、人民戦線、移住とフランス社会、20世紀の女性の活躍、1931年のフランス帝国、アルジェリア戦争)〈13-14時間〉	【フランスとヨーロッパ:国際化社会の中の躍動】 テーマ1)近隣地域の理解(高校(lycée)周辺におけるケーススタディ)〈7-8時間〉 テーマ2)国土の保全と開発(国土のポテンシャルと制約、フランスの都市の人口動態、都市化、都市整備、世界市場に対するダイナミックな生産空間、世界ハブ「シャルル・ド・ゴール国際空港」)〈16-17時間〉 テーマ3)世界の中のEUとフランス(EUの境界と範囲、社会空間の不均衡・不平等、島嶼部の開発、世界におけるEUの役割、世界におけるフランスの存在、世界都市パリ、海上交通の玄関「Northern Range」)〈13-14時間〉
リゼ Lycée	人文系 (littéraire; L) 経済・社会系 (économique et social; ES)	最終級 Terminale	【国際化と地理的な力学】 テーマ1)複雑な世界の読解の鍵(地図・図表)〈5-6時間〉 テーマ2)国際化の原動力(グローバル製品、工程、移動性、資金、販売網、世界都市、港湾・海上交通)〈20-22時間〉 テーマ3)大陸規模の地理的な力学(アメリカ大陸:緊張と地域統合の側面、アメリカ合衆国とブラジル:世界的役割と領土力学、サハラ:資源と矛盾、アフリカ大陸:開発と国際化、ムンバイ:現代性と不平等、東南アジア:人口と成長の挑戦、日本と中国:地域内競争と世界的野心)〈32-34時間〉
	第1級 1ère (Première)	テーマ1)19世紀中頃以降の経済成長(英、米、多様)・国際化と変化(移住とフランス社会)〈9-10時間〉 テーマ2)20世紀の戦争(第一次・第二次世界大戦と平和への希望、冷戦と新しい紛争)〈16-17時間〉 テーマ3)全体主義の世紀(ソビエト・ファシスト・ナチの起源と興亡)〈10-11時間〉 テーマ4)植民地化(19世紀末のアフリカ分割、1931年のフランス帝国)と脱植民地化(インド帝国の終焉、アルジェリア戦争)〈7-8時間〉 テーマ5)フランス共和国(第三共和政、レジスタンス、第五共和政、人民戦線、1880年以降の宗教とライシテ、20世紀の女性の活躍)〈15-16時間〉	【フランスとヨーロッパ:国際化社会の中の躍動】 テーマ1)近隣地域の理解(高校(lycée)周辺におけるケーススタディ、フランス国内における地域圏(regions)の場所と役割)〈11-12時間〉 テーマ2)国土の保全と開発(国土のポテンシャルと制約、フランスの都市の人口動態、都市化、都市整備、世界市場に対するダイナミックな生産空間、世界ハブ「シャルル・ド・ゴール国際空港」)〈24-26時間〉 テーマ3)EU:領域のダイナミックな開発(EUの境界と範囲、社会空間の不均衡・不平等、島嶼部の開発)〈11-12時間〉 テーマ4)世界の中のEUとフランス(世界におけるEUの役割、海上交通の玄関「Northern Range」、EUと地中海、世界におけるフランスの存在、観光大国、世界都市パリ)〈11-12時間〉
	第2級 2nde (Seconde)	【世界史の中のヨーロッパ人】 テーマ1)地球人口に占めるヨーロッパ人(19世紀の移民)〈4時間〉 テーマ2)古代世界における市民権の成立(アテネ、ローマ)〈7-8時間〉 テーマ3)11~13世紀の中世ヨーロッパ社会と文化(中世キリスト教社会、田舎、都市)〈8-9時間〉 テーマ4)現代ヨーロッパ人の新しい地理的・文化的地平線(15~16世紀の世界の拡大、ルネサンスとユダヤ教、16~18世紀の科学的・技術的精神)〈10-11時間〉 テーマ5)革命・自由・国家(フランス革命、19世紀前半のフランスとヨーロッパ)〈15-16時間〉	【社会と持続可能な開発】 テーマ1)開発の課題(不平等な開発、2050年の人口:90億人以上)〈7-8時間〉 テーマ2)地上資源の管理(人口と食糧生産の成長、食糧安全保障、持続可能な農業開発、水資源の分配とアクセスの不平等、エネルギー・資源管理の必要性、環境影響と地政学的緊張)〈14-15時間〉 テーマ3)都市の整備(都市の成長、不平等な社会空間、輸送と可動性、持続可能な都市の整備)〈9-10時間〉 テーマ4)地球空間の管理(北極という空間、海岸線:切望されている空間、自然災害リスクと不平等な社会)〈14-15時間〉
	第3級 3ème(Troisième)	【1914年以降の世界】 ※「芸術(世界同時代の歴史の目撃者)」は各単元共通 I.科学・技術・経済・社会変容の1世紀 〈約15%〉 テーマ1)科学的・技術的大革新 テーマ2)生産システムの革新と社会への影響 II.世界大戦と全体主義体制(1914年、1945年) 〈約25%〉 テーマ1)第一次世界大戦:総力戦へ(1914-1918年) テーマ2)1930年代の全体主義体制 テーマ3)第二次世界大戦と大量虐殺(1939-1945年) III.世界の地政学(1945年以降) 〈約25%〉 テーマ1)冷戦 テーマ2)植民地から新生独立国家へ テーマ3)2000年代初頭までのヨーロッパの構築 テーマ4)1990年代初頭以降の世界 IV.フランスの政治 〈約35%〉 テーマ1)2つの戦争の間の共和国:弱められた勝利 テーマ2)没落と共和国の修正(1940-1946年) テーマ3)ド・ゴールと新しい共和国システム(1958-1969年) テーマ4)第五共和国	【現代世界におけるフランスとヨーロッパ】 I.フランスに住む 〈約30%〉 テーマ1)都市から田舎まで(市街化の影響) テーマ2)地域圏(regions) テーマ3)国土と人口 II.国土の保全と開発 〈約40%〉 テーマ1)生産空間 テーマ2)フランスの国土の構造 III.フランスとEU 〈約25%〉 テーマ1)EU(欧州連合) テーマ2)EUとつながるフランス IV.フランスとEUの国際的役割 〈約20%〉 テーマ1)フランス、世界への影響 テーマ2)EUの力の現実と限界
	第4学年 4ème(Quatrième)	【近代と産業時代】 ※「芸術(18世紀から19世紀の歴史の目撃者)」は各単元共通 I.18世紀のヨーロッパと世界 〈約25%〉 テーマ1)18世紀初頭の世界とヨーロッパ テーマ2)近代ヨーロッパ テーマ3)三角貿易と奴隷制度 テーマ4)ルイ16世下の君主制の困難 II.革命と帝国 〈約25%〉 テーマ1)革命期の大きな局面 テーマ2)革命期・帝国期のフランスの基礎 テーマ3)1815年のフランスとヨーロッパ III.19世紀 〈約50%〉 テーマ1)産業時代 テーマ2)1815年から1914年までのフランスの政治的発展 テーマ3)ナショナリズム(国家主義)の昂揚 テーマ4)植民地 テーマ5)1914年までのヨーロッパ	【国際化のアプローチ】 I.世界次元の交換 〈約40%〉 テーマ1)生産と交換の主なスペース(港湾) テーマ2)商品と貿易(海上交通) テーマ3)人の移動(移住および観光旅行) テーマ4)世界首都、多国籍企業 II.国際化と領土 〈約50%〉 テーマ1)アメリカ合衆国 テーマ2)新生力(中国、インド、ブラジル) テーマ3)貧しい国々 III.国際化に関する問題 〈約10%〉 テーマ1)国際化と文化的多様性 テーマ2)国際化と論争(経済・社会・環境・文化)
コレッジ Collège	第5級 5ème(Cinquième)	【中世と近代の誕生】 I.イスラム教の始め 〈約10%〉 II.封建制(11~15世紀) 〈約10%〉 テーマ1)農夫と君主 テーマ2)封建制、主権者、国家の確立 テーマ3)教会の地位 テーマ4)西欧の拡張 III.アフリカの外縁 〈約10%〉 IV.近代の誕生(15~17世紀) 〈約40%〉 テーマ1)文化的・知的変革(人文主義、ルネサンス、宗教改革、科学革命、新世界発見) テーマ2)絶対王政の出現	【人間と持続可能な開発】 I.持続可能な開発 〈約25%〉 テーマ1)持続可能な開発の条件 テーマ2)持続可能な開発と人口動態 II.不平等に開発された社会 〈約35%〉 テーマ1)健康と不平等 テーマ2)読み書きの能力と不平等 テーマ3)自然災害リスクと不平等 テーマ4)世界の貧困 III.人間と資源 〈約35%〉 テーマ1)食糧資源問題 テーマ2)水資源へのアクセス問題 テーマ3)海洋資源の管理 テーマ4)大気環境管理 テーマ5)エネルギー問題 IV.質問(選択) 〈約5%〉
	第6級 6ème(Sixième)	【古代世界から中世のはじめまで】 I.古代オリエント(メソポタミア文明、エジプト文明) 〈約10%〉 II.ギリシャ文明 〈約25%〉 テーマ1)ギリシャ文明の発祥:ポリス、神話、神殿 テーマ2)紀元前5~4世紀のアテネ:市民権と民主主義 テーマ3)アレクサンダー大王、古代ギリシャの科学者 III.古代ローマ 〈約25%〉 テーマ1)共和国の起源と終焉:開始、政治体制、征服 テーマ2)帝国:帝政、都市、ローマ化 IV.ユダヤ教とキリスト教の始め 〈約20%〉 テーマ1)ユダヤ教の始め テーマ2)キリスト教の始め V.中世キリスト教の帝国 〈約10%〉 VI.遠い世界の外縁 〈約10%〉 テーマ1)漢時代の中国 テーマ2)グプタ朝のインド	【地球に住む】 I.身近な空間:景観と領域 〈約10%〉 II.人々は地球上のどこに住んでいますか? 〈約20%〉 III.都市に住む 〈約15%〉 IV.地方に住む 〈約15%〉 V.海岸線に住む 〈約15%〉 VI.制約の強い地域(高温砂漠、寒冷地、高地、島)に住む 〈約15%〉 VII.質問(選択) 〈約5%〉 ※「景観(PAYSAGES)」というツールを積極的に活用した学習プログラム

※ "Cycle terminal de la série scientifique / Programme de l'enseignement d'histoire-géographie", Bulletin officiel n° 8 du 21 février 2013, (Ministère de l'Éducation nationale)
 ※ "Classes de terminale des séries économique et sociale (ES) et littéraire (L) / Programme d'enseignement de l'histoire-géographie", Bulletin officiel n° 42 du 14 novembre 2013, (Ministère de l'Éducation nationale)
 ※ "Programme d'enseignement commun d'histoire-géographie en classe de première des séries générales", Bulletin officiel spécial n° 9 du 30 septembre 2010, (Ministère de l'Éducation nationale)
 ※ "Programme d'enseignement d'histoire-géographie en classe de seconde générale et technologique", Bulletin officiel spécial n° 4 du 29 avril 2010, (Ministère de l'Éducation nationale)
 ※ "Programme d'enseignement d'histoire-géographie-éducation civique pour les classes de sixième, de cinquième, de quatrième et de troisième de collège", Bulletin officiel spécial n° 6 du 28 août 2008, (Ministère de l'Éducation nationale)

3.1 中学・高校7年間必修の「歴史・地理」同時教育

フランスの学校教育では、歴史と地理はともにフランス国民としての人間形成に必要不可欠な教科目で、相互に補完しあう関係にあると認識されている。このため、日本の中学・高校に相当するコレージュとリセでは「歴史・地理」は一体不可分の必修教科目となっており、大学やグランゼコールへの進学を目指す一般バカロレアや技術バカロレア（一部）を受験する生徒は、中等教育の7年間、毎年、歴史と地理を学習する。

また、コレージュの教科書は歴史（冊子前半）と地理（冊子後半）が一冊にまとめられている。

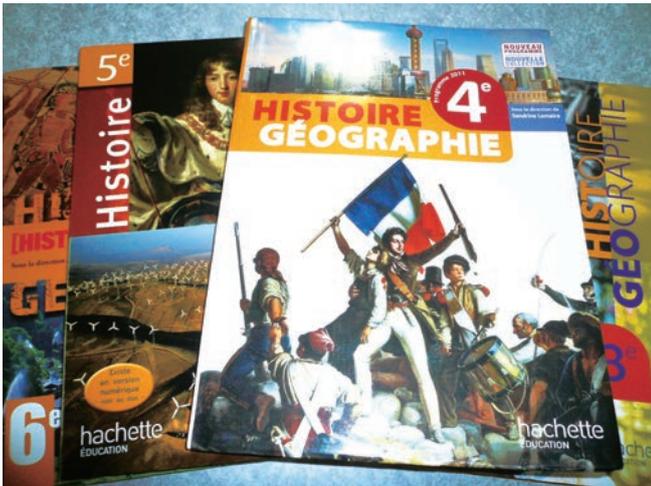


図2 フランスの歴史・地理教科書（Hachette社）

3.2 母国フランスを中心とする「歴史・地理」教育

コレージュとリセの「歴史・地理」教育は、母国フランスとヨーロッパ（EU）を学習の中心に据えている。歴史分野では、古代オリエント・中国・インド王朝、中近世のイスラム国家・アフリカ、植民地時代のインド・アルジェリアを除けば、フランスやヨーロッパ以外の国・地域の歴史はほとんど取り上げられることはない。地理分野でも、フランスやヨーロッパ以外の国・地域は、「持続可能な開発」や「国際化」をテーマとする学習単位において、ケーススタディとして限定的に取り上げられる程度である。

また、上級学年になるにつれて学習対象とする空間のサイズを小さくしていくという学習プログラムによって、フランスの「歴史・地理」教育は、コレージュの第3級（最終学年）及びリセの第1級において、母国フランスの戦後現代史とフランス地誌に総体化される。

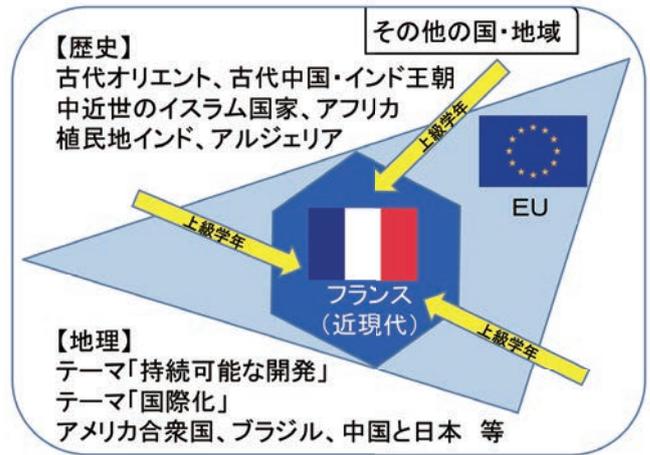


図3 フランスを中心とする「歴史・地理」教育

3.3 中学・高校を通じた「歴史・地理」の繰り返し学習

前述の通り、フランスの「歴史・地理」教育は、母国フランスを中心とする学習内容となっており、わが国（日本）のように自国史とは別の「世界史」の履修を義務付けたり、世界の国・地域の地誌を網羅的に学習させたりすることはない。このため、中学・高校を通して、「歴史・地理」に関する重要な枠組みや基本的事項を、繰り返し学習することが可能となっている。具体的には、歴史分野では、フランスを中心とした通史をコレージュで1回、リセで1回、計2回繰り返し学習する。一方、地理分野は「持続可能な開発」「国際化」「現代世界におけるフランスとEU」という3大テーマがコレージュとリセ共通の学習内容であるが、こちらもコレージュで1回、リセで1回、計2回繰り返し学習する。

フランス地理教育(繰り返し学習)



図4 フランス地理教育（繰り返し学習）

3.4 近現代史を重視した歴史教育

フランスでは、コレージュの4年間をかけてゆっくりと古代から現代にいたる通史を学ぶが、このうちフランス革命を含む18世紀以降のフランス及びヨーロッパを主要舞台とする近現

代史は、生徒の発達段階が進んだ第4級と第3級の2カ年をかけて学習する。更にリセでは、第2級で古代から19世紀前半までを学習し、第1級と最終級では、それ以後の近現代史を扱うプログラムとなっている。つまり、フランスの中等歴史教育は近現代史を極めて重要視しており、日本でよく聞くような「授業時間が足りず、明治以降の近現代史はほとんど学習しなかった」ということは起こりえない。また、フランス革命期以降では、教科書素材として「風刺画」が数多く用いられているが、これもフランスの歴史教育（教科書）の特徴である。

フランス歴史教育(近現代史重視)

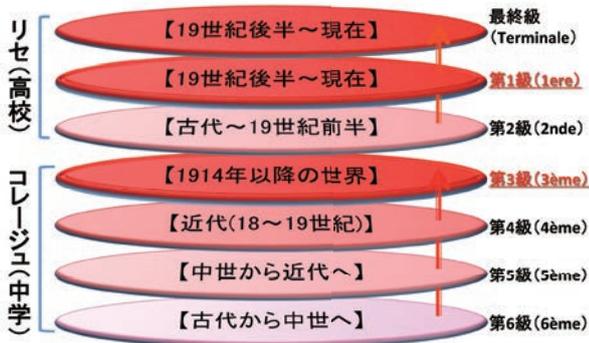


図5 フランス歴史教育(近現代史重視)

ちなみに、フランス革命に影響を与えたとされる啓蒙思想(Lumières)を学習する単元では、代表的な歴史的人物として、哲学者のヴォルテール(Voltaire: 1694年-1778年)と博物学者のビュフォン(Buffon: 1707年-88年)を取り上げている。

ルソーやモンテスキューに比べて、わが国では二人はマイナーな存在であるが、母国フランスの歴史教科書で取り上げられる啓蒙思想家の代表は、ヴォルテールとビュフォンなのである。そして彼ら二人は、いずれもイギリスの自然哲学者アイザック・ニュートンから大きな影響を受けていた。当時、ニュートンは、ヨーロッパを席卷していたアリストテレスやデカルトの哲学(結論を設定して証明する演繹法)を根本的に覆し、例証をつみあげるといった科学的アプローチ(帰納法)によって結論を導き出す方法を揺るがさないものにした。

ヴォルテールは、人間の理性を信頼し、自由を信奉した。ヴォルテールの活動として最も有名なものは、腐敗していたカトリック教会、キリスト教の悪弊を弾劾し是正することであったが、彼は、人間は理性を働かせて文明を作り、その文明が進むにつれて社会も進歩していくものだし、また進歩させるのが自分たちの役目であると考えていた。

一方のビュフォンも、デカルト的な「動物は機械である」と

いう見方に反対し、ニュートンの科学的アプローチを生物学に適用しようとした。彼が執筆した百科事典『博物史』は、生物の漸進的な進化の可能性を示唆している。



図6 フランス革命の風刺画¹⁶⁾

なお、イギリスの歴史教科書とは異なり、フランスの歴史教科書では、インフラストラクチャーに関する記述が登場する場面は極めて限定的で、18・19世紀の海上交易と港湾都市(ロンドン、ナントなど)に関する記述を除けば、産業革命期19世紀の鉄道整備を取り上げている見開きページが存在する程度である。当該ページでは、オノレ・ドーミエ(Honoré Daumier)作の機関車をめぐる風刺画、19世紀のヨーロッパの鉄道ネットワーク図、当時の鉄道整備の影響を物語る新聞記事、1884年に完成(1888年に開通)したGarabit鉄道橋のスケッチなどの資料が提示され、鉄道の整備が物資輸送の効率化・高速化・低廉化を実現し、フランスの経済発展の原動力になったと解説している。

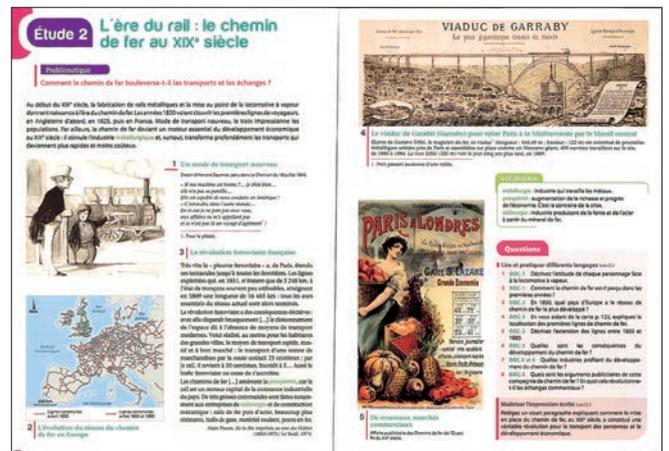


図7 「レールの時代: 19世紀の鉄道」¹⁶⁾

3.5 景観 (paysages) で始まる地理学習 (地理教育の特徴①)

フランスの地理教育では「景観 (paysages)」が非常に重

要視される。コレッジ1年目（第6級）の学習指導要領によると、地理教育の第1テーマは「身近な空間：景観と領域」であり、空間を把握する特別なツールとして「景観」が位置づけられている。また、その後の学習プログラムでは、学習対象を世界に広げ、「都市に住む」「地方に住む」「海岸線に住む」「制約の強い地域（高温砂漠、寒冷地、高地、島）に住む」といったテーマ毎に、人間社会（人の国土への働きかけの歴史）の多様性を取り扱うが、「景観」はそれぞれの地域の特徴を読み解く重要なツールとして機能している。フランスの地理教育は、写真や図などに描かれた空間や景観をどのように解釈するかが学習の起点となっている。

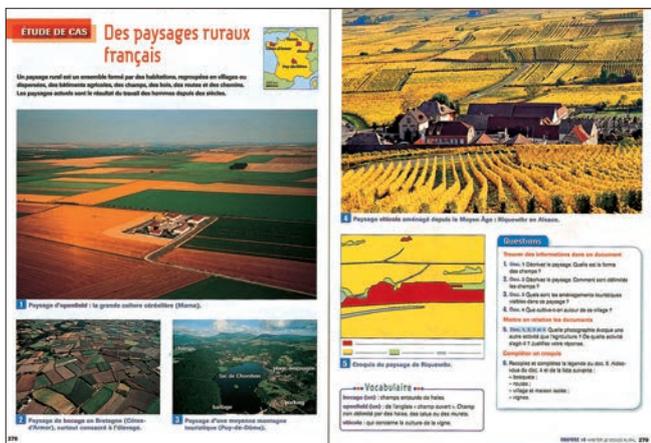


図8 「フランスの田園景観」¹⁴⁾

3.6 ケーススタディを基軸とする帰納的学習方法 (地理教育の特徴②)

地理教科書の一つの学習テーマは、「問題提起」→「ケーススタディ（複数）」→「基礎知識の学習」→「基本となる地図」→「練習問題」→「まとめ」といった流れで構成されている。これは、ケーススタディから一般的・普遍的な考え方を見出そうとする帰納的学習方法で、どちらかと言えば体系的・網羅的な知識の習得に軸足を置く我が国の地理学習の方法とは大きく異なる。また、それぞれのケーススタディでは、数多くのテキスト・写真・地図・統計が提示されているが、これら一つひとつの資料に設問があり、それに答えることで資料を読み解く力を養っていくとともに、学習課題について理解を深めていくことができるようになっている。ケーススタディを基軸とする帰納的学習方法を効果的に実践するためには、生徒だけでなく、教える側にも高いパフォーマンスが求められるが、中等教育課程の生徒の学習・認知の発達段階を考えれば、事例を解釈して地理学的推論ができるようになるという意味において、優れた学習方法であると言える。

3.7 クロッキー（croquis）で学習課題の全体像を総体化 (地理教育の特徴③)

近年のバカロレア試験（地理）では、「ブラジルの国土のダイナミズム（Croquis : Les dynamiques territoriales du Brésil)」、「空間の再構成：ロシア（Croquis : Un espace en recomposition : la Russie)」、「衝動の中心、世界の開発の不平等（Croquis : Centres d'impulsion et inégalités de développement dans le monde)」など、ある学習課題を略図（白地図）にまとめなさいという形式の問題が多い。これは、2002年の学習指導要領において採択された「クロッキー（croquis）」と呼ばれる地理の学習スキルで、学習課題の全体像を視覚的で分かりやすい図に総体化させるものである。優れたクロッキーを作成するためには、与えられた課題を正確に読み解く力、課題の説明に必要な充分な知識、読み手にわかりやすく描く表現力など、かなり難易度の高い能力が求められるため、リセの最終級の教科書には、各学習テーマの最後にバカロレア対策の練習問題が用意されている。

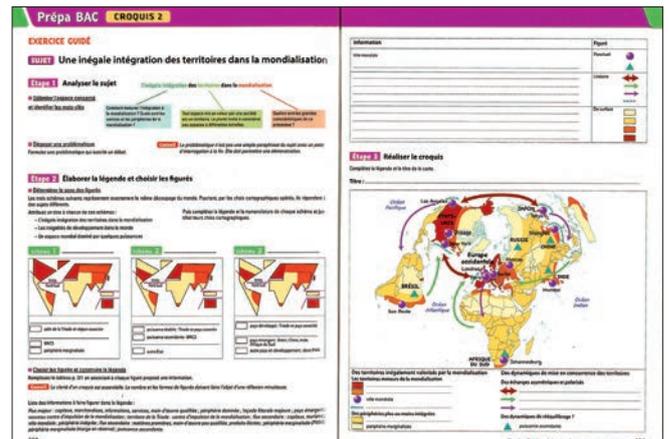


図9 バカロレア対策の練習問題（例）²⁰⁾

3.8 シェマ（schéma）とオルガニグラム（organigramme） (地理教育の特徴④)

地理教科書の学習テーマ毎の「まとめ」では、箇条書きの要点文とあわせて、地域（空間）の多様な特徴をテーマ図として具象化（記号表現）した「シェマ（schéma）」や、学習課題の全体像を体系図（フロー図）として視覚的に表した「オルガニグラム（organigramme）」が用いられる。現在のフランス地理教育は、ケーススタディを基軸として、地域（空間）をとりまく課題をテキスト・写真・地図・統計から読み解き、クロッキーやシェマ・オルガニグラムによって表現すること、言い換えれば、今日の世界（特にヨーロッパ）を解釈し、フランス国民として明日を推論する力やスキルを習得することをめざしている。

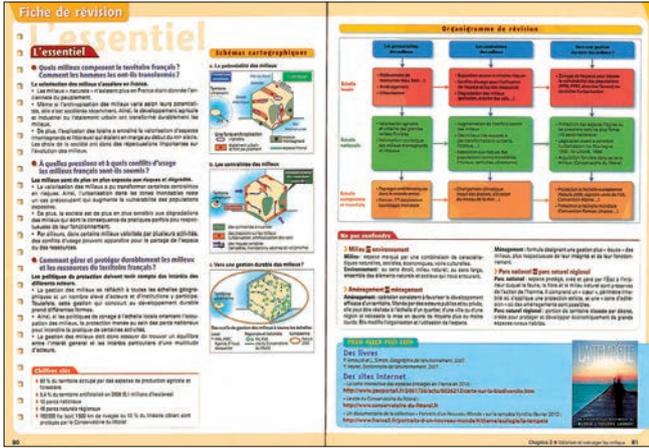


図10 シェマ (schéma) とオルガニグラム (organigramme) の例¹⁹⁾

4 フランスの地理教科書における国土・インフラ教育の内容

4.1 景観を用いた都市と地方の空間学習 (第6級)

コラージュ第6級 (第1学年) では、世界一の観光客を惹き付けるフランスの首都パリ、世界都市ニューヨーク (アメリカ合衆国)、エジプトの首都カイロ等を取り上げ、都市形成の歴史、人口動態と都市の成長スピード、政治的・経済的・文化的役割の重要性、都市空間の立体的活用 (高度利用) の程度、都市郊外の居住環境等についてケーススタディを通して学習する。

一方、地方については、フランスの農村景観、北アメリカの大規模農業景観、アフリカの原始的農業景観、及びアジアの稲作農業景観の4ケースが取り上げられているが、アジアの稲作農業景観では「稲作文化」を深掘りし、稲作の生産性の高さからアジアの人口密度の高さ (=アジアという一大勢力圏の形成) につながっていると解説する。

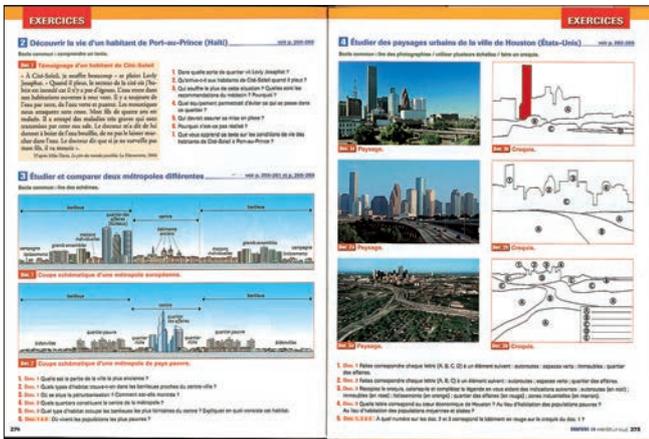


図11 欧州と途上国の都市構造の違い/ヒューストンの都心と郊外の景観¹⁴⁾

4.2 持続可能な開発と交通システム (第5級・第2級)

フランスの地理学は、人間がどのように主体的に国土に働きかけてきたか、環境を利用してきたか、ということに関心を持ってきた。このため、コラージュ・リセの地理教科書では、自然地理と人文地理の内容を個別に学ぶということではなく、「持続可能な開発」や「国際化」といった現代社会の課題にそって、自然地理・人文地理横断的な学習テーマが設定されている。

コラージュ第5級とリセ第2級では「持続可能な開発」を学習課題としているが、このうち、コラージュ第5級の交通システムを取り扱ったページでは、①フランス第2の都市リヨンの大気環境管理と公共交通システム、②フランスの人気観光地モン・サン＝ミシェル (Mont Saint-Michel) への観光交通の負荷と世界遺産の保全、③パリの大気環境管理の取り組み (自転車貸出システム「ヴェリブ (Vélib) 」や路面電車「トラム (Tramways) 」など)、④ロサンゼルス地域の大気環境管理 (深刻化する交通渋滞と高速道路相乗り車線 (カープール)) について、ケーススタディが展開される。

リセ第2級では、ケーススタディ対象としてロンドン (イギリス)、ラゴス (ナイジェリア)、クアラルンプール (マレーシア) 等を取り上げ、約50ページを割いて、都市の持続可能な開発と交通システムについて説明がなされている。

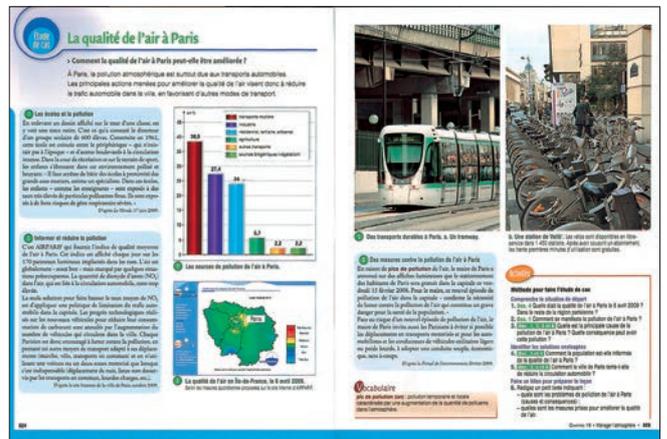


図12 「パリの大気質」¹⁵⁾

4.3 自然災害リスクと不平等 (第5級・第2級)

コラージュ第5級とリセ第2級には「自然災害リスクと不平等」を取り扱う単元があり、自然災害リスクが人間社会に与える影響と、その影響の程度が経済先進国と後進国とで大きく異なることを学ぶ。

コラージュ第5級の教科書では、世界人口の約3分の1が地震、津波、火山噴火、ハリケーン (サイクロン) 等の自然災害リスクが存在する地域に暮らしているとした上で、ケーススタディの対象として、2005年8月末にアメリカ合衆国南東部

の都市ニューオーリンズを襲った「ハリケーン・カトリーナ」と、2010年1月12日にハイチ共和国で発生した「ハイチ地震」を取り上げ、自然災害リスクに対する脆弱性を比較・評価している。いずれも世界規模の大災害であったが、災害リスクの軽減や災害からの復旧が財政的に可能であったアメリカに対して、ハイチの場合は、大規模な国際的支援を受けたにもかかわらず、政情不安定に起因する社会基盤の脆弱さも相まって、単一の地震災害としては近年空前の大規模な被害となってしまったことが説明されている。

また、リセ第2級の教科書では、2011年3月11日に発生した「東日本大震災と福島第一原子力発電所事故」、2011年10月23日に発生した「トルコ東部地震」、そして2012年10月にニューヨークに上陸した「ハリケーン・サンディ」をケーススタディ対象として取り上げ、これらの事例研究を踏まえた上で、より詳細に、自然災害リスク・技術リスクが人間社会に与える影響と、その影響の程度が経済先進国と後進国とで大きく異なることを学ぶことができるようになっている。国家の成熟度により、リスクの深刻さや規模は異なるのである。

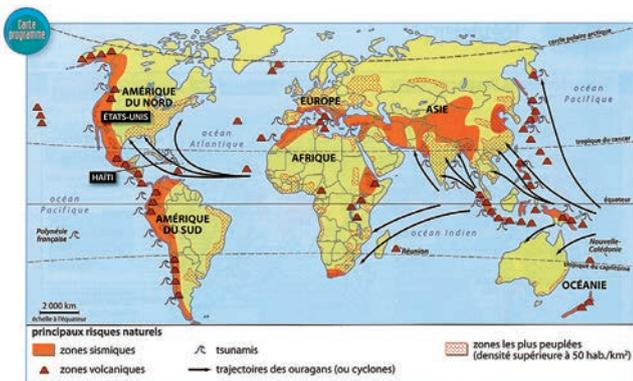


図13 「世界の人口密集地域と主要な自然災害リスク」¹⁵⁾

4.4 海岸線と港湾：生産と交換の主要空間（第4級・第2級）

フランスの地理学では、港湾や海岸線に対する関心が非常に高い。これは、海洋活動（水産業、工鉱業、貿易等）とその前提となる港湾等のインフラストラクチャーが、国家の興亡の鍵を握る要素になると認識されているからである。コレージュ第4級の教科書では、ヨーロッパ最大の港である「ロッテルダム港」と、成長著しい中国の新しいコンテナターミナル「上海港（洋山深水港）」をケーススタディ対象として取り上げ、国際港湾の機能や役割を解説している。

リセ第2級でも、コンテナ貨物取扱量で世界トップの座を競うアジア最大級のハブ「シンガポール港」、沿岸都市が観光客を魅了する「モロッコの海岸線」が取り上げられている。

4.5 フランスに住む（第3級）

コレージュ第3級（最終学年）の教科書は、母国フランスとヨーロッパ（EU）を学習の中心に据えている。これは、上級学年になるにつれて学習対象とする空間のサイズを小さくしていくという学習プログラムによるもので、フランスの中学地理教育は、周辺としてのヨーロッパを含んだ母国フランスの地誌に総体化される。テーマ「フランスに住む」では、都市空間と田舎（農村）の区分、地域圏（régions）の多様性、交通インフラの重要性、国土と人口動態に関する説明がなされている。

(1) 都市から田舎まで（市街化の影響）

- ・フランスでは、国土の41%を占める都市空間（市街地8%、準市街地33%）に人口の82%が住んでおり、国土の59%を占める田舎（農村）には、約1,180万人の人口と国立公園（9箇所）／地域自然公園（46箇所）が含まれる。
- ・田舎（農村）の市街化は、大気汚染や景観阻害といった環境問題を提起している。
- ・「持続可能な開発」は都市の主要課題であり、自動車の流入制限（＝公共交通機関の活用）が都市計画上の重要な施策となっている。
- ・フランス南部の都市・モンペリエ（Montpellier：人口約26万人）では、トラム（路面電車）のネットワーク化が進められており、花柄模様のトラムが走る街並みは観光客を引き寄せ、地域活性化にもつながっている。（ケーススタディ）



図14 「都市開発：モンペリエのトラム」¹⁷⁾

(2) 地域圏（レジオン； régions）

- ・フランスは、海外県・海外領土を含め27の地域圏（レジオン：régions）に区分されるが、これらは、山脈（アルプス山脈、ピレネー山脈、オーヴェルニュ火山帯）、海岸（地中海沿岸、大西洋沿岸）、自然環境や気候、人口、都市、交通システム（高速道路、高速鉄道路線LGV）、経済活動（農業、

工業、サービス業)などの地理的要素、及び歴史的要素によって特徴付けられる。

- ・イル＝ド＝フランス地域圏 (Île-de-France : 首府＝パリ) は、フランスで最も裕福な地域圏である (GDPの30%を占有している)。
- ・フランスの西部や中央山塊に位置する地域圏は、伝統的に農業を主要産業としている。
- ・フランス東部の地域圏では、EUレベルの交通インフラ整備を通して、近隣諸国とのダイナミックな連携が始まろうとしている。
- ・例えば、フランスの高速鉄道TGVとイタリアの高速鉄道TAVを接続するリヨン・トリノ新線 (LGV Lyon-Turin : 旅客・貨物両用の高速鉄道路線。アルプス山脈の下を57kmの長大トンネルで通過する。2025年開通予定) は、欧州北部の大都市であるロンドン・ブリュッセル・パリと、イタリア半島の重要都市であるミラノ・フィレンツェ・ローマとをつなぐEUレベルの重点プロジェクトであり、工業や山岳観光に力を入れるローヌ＝アルプ地域圏の発展にとって、極めて重要な役割を果たすことが期待されている。(ケーススタディ)

(3) 国土と人口 (うち、「国土」に関する記述)

- ・フランスの国土は西ヨーロッパに位置する本土 (面積550,000km²)のほか、南米のフランス領ギアナや大西洋・インド洋・太平洋に浮かぶ島々からなる海外県・海外領土で構成される。
- ・フランス本土は概ね六角形の形状をしており、6辺の国境は、3辺が海 (イギリス海峡、大西洋、地中海)、2辺が山脈 (ピレネーとアルプス)、1辺が平野と川 (ライン川) となっている。また、国土の大半は緩やかな丘陵地や平野であり、気候も比較的穏やかであるが、洪水 (ライン川、ロワール川、セーヌ川、ガロンヌ川、ローヌ川の沿川)、雪崩 (アルプス山脈やピレネー山脈)、嵐 (イギリス海峡や大西洋の沿岸)、熱波などの自然災害が発生することもある。
- ・海外県・海外領土には火山活動が活発な地域も少なくなく、これらの地域では地震災害リスクも大きい。また、熱帯に位置する海外県・海外領土では、サイクロンの被害も発生する。

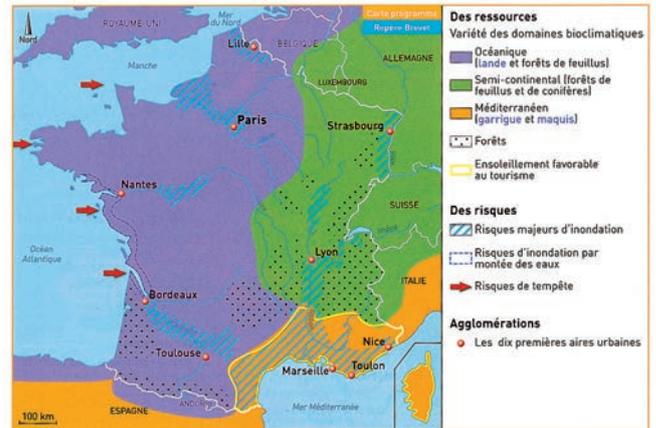


図15 「フランス本土の気候と自然災害リスク」¹⁷⁾

4.6 国土の保全と開発 (第3級)

コレッジ第3級には、フランスの産業と国土構造を扱うテーマ「国土の保全と開発」があり、工業・農業・観光業・その他サービス業について、それぞれの産業と国土との関係 (立地条件・空間利用条件) が説明されるとともに、フランスの国土の空間構造の現状と今後の方向性 (世界都市パリの国際競争力強化とEU連携による地方支援) が示されている。

(1) 生産空間

【工業と空間】

- ・フランスでは労働人口の14.7%が第2次産業 (工業) に従事しており、工業生産額は世界第5位、EU第2位である。
- ・工業地域は、時代の変遷とともに大きく変化してきた。19世紀には北部の炭鉱と鉱山に接近して工業地域が生まれた。その後、エネルギー革命 (石炭から石油へ) によって、臨海部に工業・港湾ゾーン (ZIP : zones industrialo-portuaires) が建設され、ル・アーヴル (Le Havre)、ダンケルク (Dunkerque)、ナント (Nantes)、フォス＝シュル＝メール (Fos-sur-Mer) といった港湾都市で、重化学工業が発達した。
- ・第一次石油危機以降は、原子力発電を中心とするエネルギー政策を推進しており、原子力発電所は、海岸沿い大きな河川沿いに立地している。
- ・今日、フランスではハイテク産業が盛んであり、エアロスペースバレー (Aerospace Valley : 航空宇宙産業) をはじめ、気候の良いフランス南部の大都市周辺地域などで、大学や研究所と連携した最先端の技術開発・工業生産が進められている。

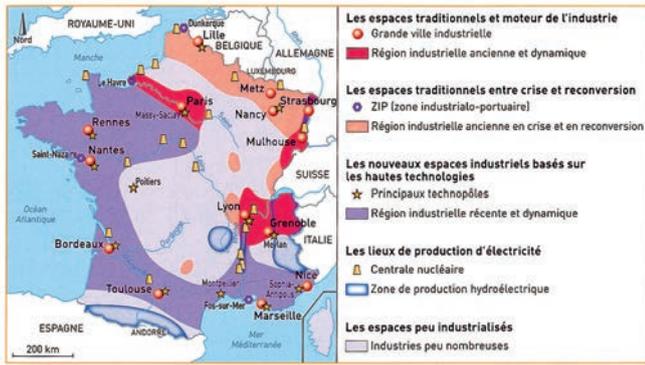


図16 「フランスの工業地域区分と原子力発電所分布」¹⁷⁾

【農業と空間】

- ・フランスの国土の59%は農地で、農業輸出額は世界第2位、EU第1位である。また、農業は国土の景観保全にも大いに役立っている。
- ・フランスの農業区分は、畜産、穀物栽培、果樹・野菜栽培、ブドウ栽培に専門化してきており、混合農業は縮小傾向にある。
- ・農業生産物の専門化と商品化は、化学薬品（肥料、殺虫剤）の使用と機械化により拡大したが、一方で、環境上の問題（化学肥料による地下水汚染など）が生じている。

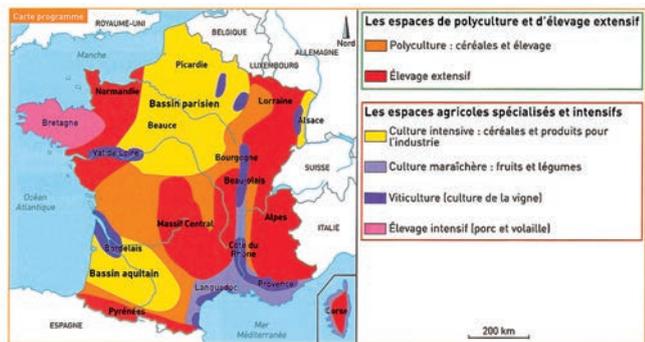


図17 「フランスの農業地域区分」¹⁷⁾

【観光業と空間】

- ・フランスは世界一の観光大国であり、年間の外国人旅行者数は8,000万人を超えるが、その背景には、南部の温暖な気候、多様な自然景観（海岸線や山脈）、文化遺産（歴史的な建造物や美術館・博物館）などのフランス特有の地理的な特徴がある。
- ・パリは文化遺産を主な観光資源とする世界屈指の観光都市で、ルーブル美術館、ノートルダム大聖堂及びエッフェル塔は最も人気のある観光地となっている。また、ユーロ・ディズニーが、さらに多くの観光客を引きつけている。
- ・パリ観光以外の主要な旅行としては、地中海沿岸や大西洋沿

岸を訪ねる海水浴旅行、及びアルプス山脈やピレネー山脈を訪れるスキー旅行をあげることができる。田舎（農村）ではグリーン・ツーリズムも盛んである。

【サービス業と空間】

- ・労働力人口の75%はサービス業（第3次産業）に従事している。
- ・全ての（産業）活動の最終段階はサービス業に集約されるため、サービス業が営まれる空間は至る所に存在するが、特に、顧客の多い都市空間で盛んである。
- ・経済のグローバル化により、ラ・デファンス（シャンゼリゼ通りと凱旋門の延長線上に位置するパリ近郊の再開発地区）やユーラリール（英仏海峡トンネルの開通に伴い新設されたTGVのリールヨーロッパ駅周辺の開発地区）といった巨大な都市が開発された。これらの新都市は、TGV駅、空港、高速道路などのインフラストラクチャーによってネットワーク化されることで、大手銀行や大手保険会社を惹き付けている（超高層ビルやシンボリックな建築物が集積している）。

(2) フランスの国土の構造

【国内の地域間格差】

- ・フランスの首都パリは、同国の政治的・経済的・文化的中心であり、国富の集中が進んでいる（フランスのGDPの28.6%を占有している）。また、パリは人口1,200万人を抱えるトップクラスの世界都市でもあり、世界の政治、経済、金融、文化に大きな影響を与えている。
- ・東部（リヨンがあるローヌ＝アルプ地域圏、マルセイユがあるプロヴァンス＝アルプ＝コート・ダジュール地域圏）は、歴史的に産業集積が進んでおり、相対的に豊かである。
- ・西部では、近年、ハイテク産業が盛んになってきている。
- ・北東部（リールがあるノール＝パ・ド・カレー地域圏）では、主力であった鉄鋼業や造船業などが斜陽化し、産業構造の転換を求められている。
- ・中央山塊を含む内陸地域は、外部世界との結びつきは少ない。

【特権的な場所】

- ・グローバル化の進展によって、利便性の高い場所に、生産や富の集積が進んでいる。
- ・「大都市」には、人口と経済活動が集中しており、多くの富を作り出している。大都市は、世界都市パリとEUレベルの大都市（リール、ストラスブルグ、リヨン、マルセイユ、ニース、トゥールーズ、ボルドー、ナント）に階層化され、その勢力範囲は国内全域に及んでいる。
- ・「海岸（港）」は、世界に開かれた特別な場所（空間）であり、

ますます多くの活動が展開されている。

- ・EUの枠組みを前提に、国境を超えた複数自治体が主体となって協力関係をもつ地域「ユーロレジオン(Eurorégion)」が構築されつつある。

【官民の役割と機能】

- ・フランス政府は、首都パリへの一極集中を是正しようとしてきたが、今後は、国家の原動力として機能させるため(ヨーロッパ、そして世界スケールで魅力的な都市にするため)、パリの国際競争力強化を支援することとしている。
- ・地方自治体(地域圏、県、市町村)の参加を前提に、EUは地域の課題を解決するプログラムを支援(資金提供を実施)している。また、官民のパートナーシップにより、行政と民間会社が連携することもある。

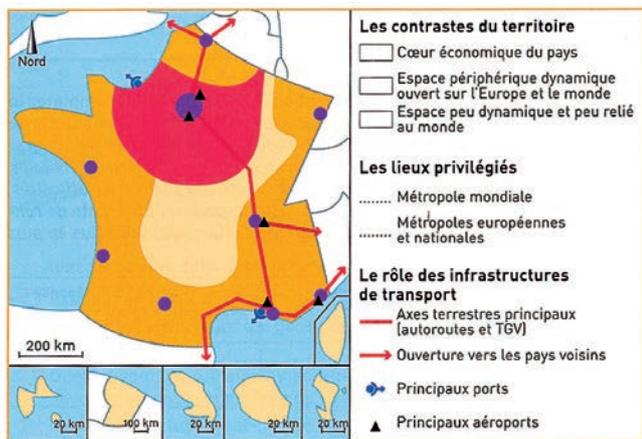


図18 「フランスの国土の構造」¹⁷⁾

4.7 EU規模で広がる交通ネットワークと環境リスク(第3級)

コレージュ第3級には、交通ネットワークと環境リスクを扱うテーマ「EUとつながるフランス」があり、ここでは、交通ネットワークがフランスの国土を組織化し、ヨーロッパ全体のコミュニケーション軸として機能していること、また自然災害リスクや技術リスク(原子力発電を含む)が人間社会に与える影響と、その脅威(脆弱性)を低減するための方策について学ぶことができる。

【交通インフラによるフランス国土の組織化】

- ・フランス国内の一般道路と高速道路のネットワークは、旅客交通の90%、貨物交通の2/3を担っている。高速道路ネットワークは10,000kmを超え、主要な高速道路はパリを中心として放射線状に延びており、最も重要な高速道路軸はリール=パリ=リヨン=マルセイユを連結している。
- ・TGV(Train à Grande Vitesse)が走るフランスの高速鉄道路線LGVネットワークは、パリを中心とする放射状の4本の路線とその他の路線で構成されており、国内の幹線交通

軸として大きな役割を果たしている。

- ・空港(航空)ネットワークによって、フランス国土の組織化(再強化)が図られている。国内航空輸送量のうち、旅客の3/4以上、貨物の約90%がパリの空港を利用している。このうち、シャルル・ド・ゴール空港は、TGVも停車するマルチモーダルな交通結節点として機能している。

【フランスとヨーロッパをつなぐコミュニケーション軸】

- ・EU加盟各国の国境を越えて交通インフラがネットワーク化されており、アルプス山脈、ピレネー山脈、及びイギリス海峡の下は、トンネルで接続されている。
- ・高速道路は、フランス国内のパリ=リール間、パリ=リヨン=マルセイユ間だけでなく、ドイツ、ベルギー、イタリア、スペインへとつながっている。また、TGVネットワークは、パリ、ロンドン、ブリュッセル、アムステルダム、ケルンを結んでいる。

【ヨーロッパ空間を階層化する交通ネットワーク】

- ・ヨーロッパの交通ネットワークには粗密があり、LGVラインと同様に、主要な高速道路軸は西欧に集中している。一方、多くの新規プロジェクトが東欧で展開され、新しいネットワークを構築し始めている。
- ・ヨーロッパの空間の階層化は、航空輸送によって増幅されている。英国、フランスおよびドイツは、ヨーロッパの航空輸送の半分を占めている。
- ・主要港湾は、北海、イギリス海峡および地中海の西海岸線に沿って位置している。



図19 「フランスとEUの交通ネットワーク」¹⁷⁾

【フランスとEUが抱える主要なリスク】

- ・河川の水位上昇による洪水(Inondation)は、フランスとEUが抱える主要な自然災害リスクで、道路・駐車場整備などの地表面の改変や、河川に架かる橋梁の存在によって増幅される。また、氾濫区域内の建物の建設が、被害を大きくさ

せる。

- ・嵐 (Tempête)、雪崩 (Avalanche)、山火事 (Incendie de forêt) は、頻繁に発生する自然災害リスクで、人間の軽率な行動によって、しばしば被害が拡大する。
- ・ヨーロッパでは、火山噴火 (Volcan) や地震 (Tremblement de terre) のリスクは大きくない。
- ・主要な技術リスクとして、工場の爆発 (Seveso)、火事および毒ガスによる環境汚染を挙げることができる。居住地区に近接して多数の危険な産業が営まれているので、被害が拡大するおそれがあり得る。
- ・原子力発電所事故のリスク (Risque nucléaire) は存在する。また、危険な製品輸送の事故は、毒性産物による環境汚染を引き起こすことがある。

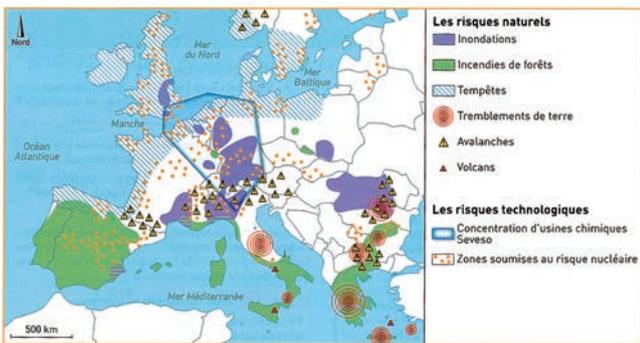


図20 「EUが抱える主要な自然災害リスクと技術リスク」¹⁷⁾

の中のEUとフランス (世界におけるEUの役割、海上交通の玄関「Northern Range」、EUと地中海、世界におけるフランスの存在、観光大国、世界都市パリ)」となっている。

フランスの地理教育では、「地理空間の構造的把握」が核心的学習課題として認識されており、そのために、フランスの教科書は徹底して資料集的である。地図、鳥瞰図、写真、分布図、統計表、文献、シエマ (schéma)、クロッキー (croquis) など、さまざまな形で地理的資料が詰め込まれているのが、フランスの教科書である。リセ第1級の地理教科書はこれをみごとに体現している。

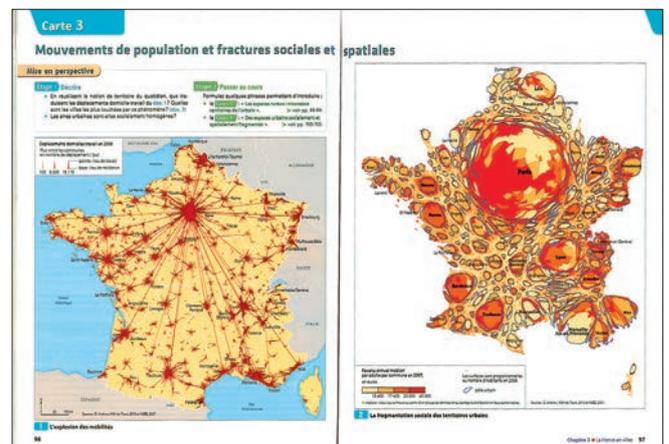


図21 フランスの都市の人口動態 (地理空間の構造的把握の例)¹⁹⁾

【社会・環境に与える脅威 (脆弱性) を低減するために】

- ・リスクは自然又は人間を起源とし、国境を超えて広がる。従って、EUは持続可能な環境の保護、リスク管理のための共通プログラムを開発した。
- ・また、激甚災害が発生した場合には、EUは域内各国と協力して、犠牲者を助けるための組織を構築する。

4.8 フランスとヨーロッパ/地理空間の構造的把握 (第1級)

リセ第1級では、コレージュ第3級で学習した「母国フランスとヨーロッパ (EU)」に関する学習を、より高度化した視点から繰り返して行う。最新 (2013年版) の学習指導要領によると、リセ第1級の学習テーマは、「テーマ1) 近隣地域の理解 (高校周辺におけるケーススタディ、フランス国内における地域圏の場所と役割)」、「テーマ2) フランス国土の保全と開発 (国土のポテンシャルと制約、フランスの都市の人口動態、都市化、都市整備、世界市場に対するダイナミックな生産空間、世界ハブ「シャルル・ド・ゴール国際空港」)」、「テーマ3) EU: 領域のダイナミックな開発 (EUの境界と範囲、社会空間の不均衡・不平等、島嶼部の開発)」、「テーマ4) 世界

5 フランスの地理教科書に描かれている日本のすがた

フランスの歴史教科書において、日本が登場することはほとんどなく、第二次世界大戦時の出来事 (真珠湾攻撃、広島への原子爆弾投下等) が掲載されている程度である。一方、フランスの地理教育は、日本を重要視しており、従来から多くの教科書ページを日本の紹介に割いてきた。以下では、最新のフランスの地理教科書で日本がどのように描かれているかを紹介する。

5.1 景観学習: 東京港・横浜港と神戸人工島 (第6級)

第4章でも述べたが、フランスの地理学では、海岸線の景観に対する関心が非常に高い。これは、海洋活動 (水産業、工鉱業、貿易等) とその前提となる港湾等のインフラストラクチャーが、国家の興亡の鍵を握る要素になると認識されているからである。従って、フランスの地理教科書が海岸空間の組織化の成功例として「東京港・横浜港」を取り上げ、島国「日本」の現在の経済発展を説明しようとしていることは必然性のあるこ

とである。また、利用可能な土地の不足を解消するため、海を埋め立てて地表面を広げた神戸の人工島(ポート・アイランド)は、フランスの地理学者・地理教育者にとって大変魅力的な事例研究対象となっている。



図22 神戸港(人工島)¹⁴⁾

5.2 世界の3大経済圏：日本のメガロポリス(第4級)

フランスの地理教科書において、「メガロポリス(Mégalopole)」という用語は特別な意味をもつ。なぜなら、フランス地理学では伝統的に、「世界の経済はアメリカとヨーロッパと日本という3つの勢力(メガロポリス)によって動かされている」という認識に立っているからである。つまり、メガロポリスは全世界に3例しか存在しない「例外的な」地理的事例を指すのであり、それは、北アメリカの大西洋沿岸地方(セント・ローレンス川からメキシコ湾まで)、ヨーロッパ(ライン川流域地方)、そして日本(太平洋沿岸地方)にのみあって、政治、経済、文化の中核的機能が集積し、比類のない超巨大都市圏を形成していると認識されているのである。

なかでも、日本のメガロポリスは、東京という世界都市の支配下に置かれ、人口および経済活動の最重要部分が太平洋沿岸地方の狭い地域帯に集中しているため、フランスの地理学では、とりわけ興味深い事例として捉えられている。

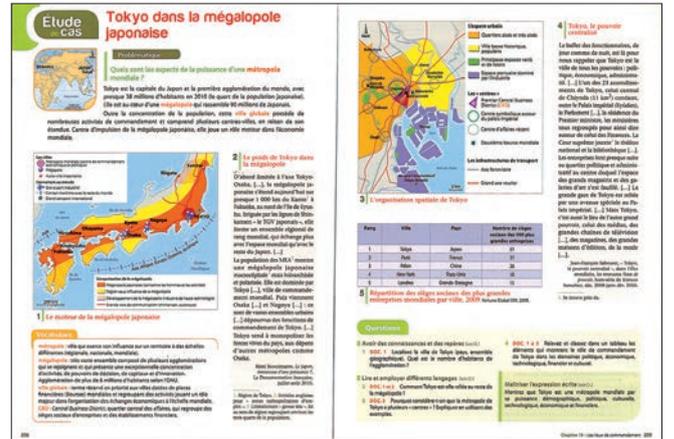


図23 「日本のメガロポリスと東京」¹⁶⁾

5.3 東日本大震災と福島第一原子力発電所事故(第2級)

リセ第2級の教科書では、経済先進国における自然災害リスク・技術リスクのケーススタディ対象として「東日本大震災と福島第一原子力発電所事故」が取り上げられており、そこでは6ページを割いて、今回の大震災と原子力発電所事故の概要と影響(カストロフィの発生)、日本の国土が自然災害に対して極めて脆弱であること、そして、これに対応するため、日本では様々な防災・減災対策が講じられていることが解説されている。

また、日本の経済中心地帯(人口密集地域)と主要な自然災害発生箇所・原子力発電所を重ね合わせた図面、民家を襲う津波の写真(宮城県)、震源地と津波被害の影響エリアを示す図面、仙台市震災復興計画津波対策施設イメージ図、神戸港震災メモリアルパークの写真(災害記憶の伝承)、東京の小学校における防災訓練の写真、ル・モンド紙の関連記事(複数)など、教科書で用いられている資料は極めて多彩である。

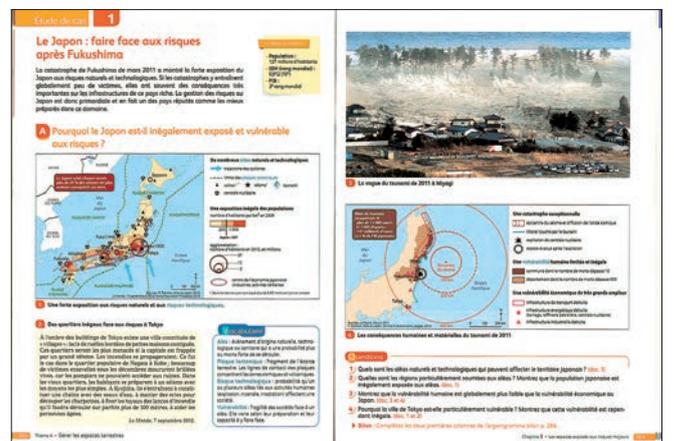


図24 「日本：危機に直面するフクシマ」¹⁸⁾

5.4 日本と中国：地域内競争と世界的野心(最終級)

フランスの地理教科書で、日本のことが最も大きく取り扱わ

れるのはリセの最終級である。最新（2013年版）の学習指導要領によると、「日本と中国：地域内競争と世界的野心」というテーマが設定されており、教科書では、南・東アジアにおける日本と中国の経済的・地政学的ライバル関係が20ページ以上を割いて説明されている。その要旨は次の通りである。

- ・南・東アジアでは、巨大な金融市場と高度な技術力を背景として、日本が経済的なリーダーシップを発揮してきた。日本は「世界の研究所」という位置づけにある。
- ・しかし、この20年間、日本が経済成長を止めていたのに対し、中国は経済競争力を高め、世界第2位の経済大国という地位を確立した。中国は「世界のワークショップ」という位置づけにある。なお、生活水準では、中国はまだ日本には及ばない。
- ・地政学的な競合関係をみると、日本がアメリカ合衆国の主導の下に世界的な政治力・役割を果たしているのに対し、中国はアメリカの影響力抜きで世界的な政治力・役割を果たすことを狙っている。

なお、教科書中では、①プリウス（ハイブリッドカー）で中国市場進出を図るトヨタ自動車（豊田章男社長）、②自衛隊のイラク派遣、③Japan Expo（フランス・パリ郊外で毎年開催されている日本文化の博覧会。漫画・アニメ・ゲーム・音楽などの大衆文化と書道・武道・茶道・折り紙などの伝統文化が含まれる）が、日本を代表する事象として写真紹介されている。

このようにフランスの地理教科書が、わが国の説明に多くのページを割いているのは、現代日本が世界の中で大きな役割を果たしているからに違いないが、学習指導要領の変遷をみていくと、実は、謙虚にならざるを得ない事実が隠されている。それは、ここ20年間で、フランスの地理教科書における日本の扱いがどんどん小さくなってきているという事実である。

1995年版学習指導要領では、「世界の三大経済大国」という大テーマがあって、そこでは「1）アメリカ大陸と世界におけるアメリカ合衆国」、「2）アジアと世界の中の日本」、「3）ヨーロッパと世界におけるドイツ」という3つのテーマが立てられていた。

2002年版学習指導要領でも「世界の三大強力圏」という大テーマは健在であったが、「1）アメリカ合衆国－超大国」、「2）欧州連合（欧州連合の経済力、ライン川流域地方－ヨーロッパ）」、「3）東アジア（拡大しつつある強力圏、日本のメガロポリス）」という構成となり、日本の扱いは小さくなった。

そして最新（2013年版）の学習指導要領では、大テーマ「大陸規模の地理的な力学」の中の一つの小テーマ「日本と中国：地域内競争と世界的野心」において、日本は中国と同列で扱わ

れることとなった。つまり、もはや日本はアジアの唯一のリーダーではないと、フランス国家が認識したのである。

大切なポイントは、それほど、フランスの地理教育は、世界経済や世界政治の変潮に鋭敏に反応しているということであり、世界のとらえ方が、平面的でなく動的、構造的になっているということである。そして、こうした地理教育を受けた青年が将来のフランスを創る、つまり、フランスの対日観はこうして形成されるということである。

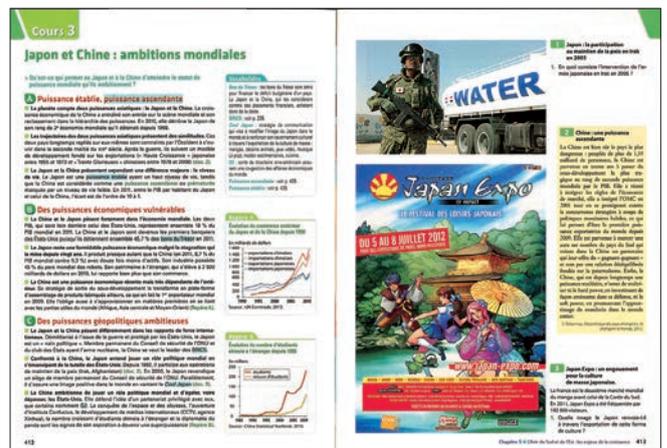


図25 フランスの地理教科書で紹介される「日本」²⁰⁾

6 交通インフラが実現したフランスの「多様性と統一性」

フランスの社会地理学者で、国土開発整備庁（DATAR）学術委員会議長を務めたアルマン・フレモン（Armand Frémont）氏は、フランスの歴史地理の多様性・統一性を次のように説明している。少し長いが、教科書に採録されていたフランスの特徴が凝縮された文章である。

「歴史的要素と地理的要素の交錯するフランスの国土は、その行政区分（3万6,000を超える市町村）と同様に、多様性に富んでいる。気候は、地中海性気候から海洋性気候、さらに海岸性から内陸性まで様々であり、地形も、パリ盆地中心部の大平原からアルプス山脈やピレネー山脈の頂、中央山塊やヴォージュ山脈のような中程度の山地からローヌ川やロワール川の大渓谷まで起伏に富んでいる。また、領土として見た場合にも、カペー朝初期の国王達の頃から国の中心であったイル・ド・フランスから、サボワ、ニース伯爵領、アルガス、ロレーヌなど、19世紀、20世紀に至るまで他国との間で所有権が争われた地域までさまざまである。土地固有の言語や、方言、習慣も多彩である。さまざまな町が存在し、その多くは大変古くからの歴史を誇っている。地方、地域も多様性に富んでいる。モザイ

クのように多彩なフランスの国土の様相は、これまでずっとそうであったように今後も続いていくだろう。それはすなわち、何世紀にも渡る伝統に根ざした田舎であり、農村であり、様々な作物を多角的に栽培する豊かな（あるいは貧しい）国である。そこでは、パリ盆地でよく見られる生産性の高い穀物栽培、西部や中央山塊に根強く残る牧畜の伝統、ブドウ、果樹、野菜の生産を基盤とする地中海型農業が3つの柱をなしている。また、その国土の多様性ゆえに、平原や牧草地、森林、ガリッグ（地中海地方の荒地や灌木林）、ブドウ畑に覆われた丘陵地や灌漑地帯に、多彩な美しい風景を見出すことができるのである。また同じ理由から、特に、穀物、肉牛、乳製品、ワイン、果物、野菜といった品目において、欧州でも一流の農産物を取り揃えているのである。さらに付け加えるなら、カリブ海やインド洋、太平洋の島々でとれる熱帯地方の農産物にも恵まれている。

ただ矛盾するのは、一あるいは相互に補完し合っているのかもしれないが—こうした多様性の集合体が、欧州、そして世界においても、最も中央集権的な国家、国土で誕生したものであるということである。国家は、県や市町村を通して共和国の統一性をはっきりと示し、公的サービス、特に学校を通じて、いたるところでその存在を示している。19世紀、20世紀における産業の発展と交通網の拡大、パリに極端に集中していた大学やグランゼコールの再配置、主に国家や国営の大企業に支えられた資本主義の導入は、パリと地方の対立構造の緩和に貢献したが、一口に地方といっても、その中にはローヌ・アルプスのような活力にあふれた所から、オーヴェルニュやリムーザンのようなずっと恵まれない場所も含まれていた。こうした集中化の蓄積の跡は、主に交通網に見出せる。鉄道は古くからの王の道をなぞるように走り、現在は航空路やTGVが、19世紀の鉄道路線をたどるように放射状に延びている。全てがパリへと集中し、全てがパリを起点にしているのである。確かに第2次世界大戦以来、強い意志を持って取り組まれている国土整備政策と、1982年の地方分権法によって、この傾向は大幅に修正された。だがフランスの国土は、かつては工業生産や主要なサービスが、そして現在では意思決定や質の高いサービス、流行、芸術、文化が、やはり中央に集中するという傾向によって、特徴づけられているのである。」

外国人観光客8,300万人／年が訪れる世界一の観光大国フランス。GDPの7%を生み出すフランス観光の強みは、こうしたフランスの「多様性と統一性」によるところが大きい。フランスは、スキー客の索道利用延べ日数が5,500万日に上る世界一のスキー観光大国であり、パリ、コード・ダジュール、モン＝サン＝ミシェルなどは、フランス観光の豊かさ、質の高

さ、多様性を示す代表例である。独自の文化や言語にこだわりの強いフランスに、世界中から多くの観光客が集まっている。

また一方で、フランスはEU最大の国土面積を誇り、EU最大の農業国でもある。工業部門も農産食品産業、自動車産業、建設産業、化学工業、鉄道産業、航空宇宙産業、エネルギー産業、医薬品・化粧品産業などが発達しており、これらの産業はいずれも、質の高い道路・鉄道・航空ネットワークの恩恵に浴している。

フランスの歴史地理学者グザヴィエ・ド・プラノール氏は、著書『フランス文化の歴史地理学』において、「産業革命の進展や交通環境の改善（とりわけ、高速交通機関の発達）、さらにはパリを中心とする全国ネットワークの形成は、それまでの単調な空間構造を大きく変容させ、フランスの国土を限りなく複雑なモザイク模様に変換させた。そこでは、農業生産の地域的専門分化が進むとともに、立地条件にすぐれた地域で工業生産が大規模に集積し、階層分化をとげた都市は全国的なネットワークを形成するようになった。空間構造のこうした転換は、19世紀末のフランスで、きわめて明瞭であった。当時、鉄道ネットワークがフランス全土をおおい、商品の流通が全国レベルでなされるようになった。一方で、農村地域からの人口流出はそれほど深刻でなく、経済環境の激変に対応して、それぞれ活力にとんだ変化をとげつつあった。フランスの国土がもっとも多様な姿を示したのは、まさにこの時期（おおよそ1875年から1914年までの期間）であった。」と述べ、フランスの多様性は歴史的にみても国家レベルの交通インフラ整備の恩恵であると説く。

岐路に立つフランス

フランスという国家は、中世以降、少なくとも1000年の年月をかけて、歴代の王権、またそれに続く共和国の、統一に執着する強い意志によって形成されてきた。文化や芸術、宗教といった側面において早い時期から「例外的に」精神的な単一空間を形成していたフランスは、王権時代から共通言語（フランス語）や法制度を整え、さらに1789年のフランス革命以降は、統一的教育システムの導入やパリを中心とする全国的な交通インフラの整備をすすめ、「単一にして不可分の共和国」を成立させた。

また、フランスは、合計特殊出生率（1人の女性が一生に産む子どもの平均数）が2.01と、ヨーロッパではアイルランドに次いで2番目に高く、出生率の平均が約1.6にとどまるEUの中では突出しているが、これは、事実婚や一人親家庭などの多様な家族のあり方に対して社会が寛容で（フランスでは非嫡

出子が約55%)、シングルマザーでも働きながら何人も子供を育てることが可能な労働環境と家族支援策が整備されている(フランスでは政府の教育費補助によって幼稚園から大学までほとんど無料で学校教育を受けることができる)という「フランス的例外」による。活力ある成熟国家、それがフランスである。

しかし、そのフランスも、今はユーロという単一の通貨を持つ経済圏のなかで、個性を発揮しきれずにいる。また、多くの欧州先進国同様、移民やその子孫の社会統合に苦しんでいる。風刺画と表現の自由をめぐる「シャルリー・エブド本社襲撃事件」は記憶に新しい。

フランスの政治思想家アレクシ・ド・トクヴィルは、著書『アンシャン・レジームと革命 (Ancien Régime et la Révolution)』の最後で、「フランス民族は、二千~三千年前にできあがっている形態において知られている、主要な諸本能においては変わっていないのである。けれどもまた同時に、この民族はその日常的な思考とその好みとにおいては、変動しているのである。そのためにこの民族は、自らには思いも及ばなかった見せものとなり、自ら成し遂げたことを見て、しばしば外国人と同様に驚くことにもなるのである。(中略) この民族は誰もこれを隷従させることをあきらめねばならないほどに自由であり、また同時に、自らでその束縛を破ることができないほどには隷従的ではない。この民族は天性的にあらゆるものに適しているが、戦争にだけ抜群にすぐれている。この民族は真の栄光よりも偶然を、権勢を、成功を、はなやかさと名声とを尊重している。この民族は能力的に美德よりも英雄行為に適しており、良識よりも天稟をさずかっている。この民族は偉大な企業を完成するよりも、巨大な計画を構想するのに適している。この国民はヨーロッパ諸国民のうちでは最も光り輝いてはいるが、最も危険な国民である。そしてこの国民は、尊敬や憎悪や憐憫や恐怖の対象と成り得るが、決して無関心の対象にはならない国民である。」と、フランス革命期の自国民のアイデンティティを表現している。

フランス革命から200年あまり。トクヴィルが想像できなかった規模とスピードでグローバル化が進んでいる。EU統合や移民の社会統合の流れの中で、フランス人のアイデンティティにも変化が見られる。「単一にして不可分の共和国」フランスは今、大きな岐路に立たされている。パリ政治学院、HEC経営大学院、そしてフランス国立行政学院(略称:エナ)という3つの名門グランゼコールを卒業した経歴をもつフランソワ・オランド大統領に課せられた責任は極めて大きい。

謝辞

本寄稿文をまとめるにあたり、問題の提起から、向き合うべき素材への気づき、人と国土との相互関係を時間軸と空間軸から見る「国土学」の視点など、俯瞰的で示唆に富んだご指導と格別のご鞭撻を賜った大石久和先生(国土政策研究所長)に、深甚なる感謝を捧げます。また、情報・企画部の生内明子さんには、本稿の作成・編集に当たり、ひとかたならぬご協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。



【参考文献】

- 1) フランス国民教育省Ministere de l'Education nationaleホームページ (<http://www.education.gouv.fr/>)
- 2) <http://www.france-examen.com>
- 3) 在日フランス大使館ホームページ「フランスの高等教育制度(概要と近年の改革)」
<http://www.ambafrance-jp.org/article4034> 最終更新日 28/05/2012
- 4) 大嶋彩加、「フランスの哲学教育」、
<http://www.cc.kyoto-su.ac.jp/~konokatu/oshima> (12-1-30)
- 5) 坂本尚志、「バカロレア哲学試験は何を評価しているか?—受験対策参考書からの考察—」、京都大学高等教育研究第18号(2012)、
http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/kiyou/data/kiyou18/05_sakamoto.pdf
- 6) 諸外国の教科書に関する調査研究委員会委員長・藤村和男((財)教科書研究センター研究部長)、「フランスの教科書制度」、平成18年度文部科学省調査研究委嘱「教科書改善のための調査研究」、平成19(2007)年3月
- 7) 国立教育政策研究所「社会科系教科のカリキュラムの改善に関する研究—諸外国の動向(2)—」、「教科等の構成と開発に関する調査研究」研究成果報告書(18)、平成16

- (2004) 年2月、
http://www.nier.go.jp/kiso/kyouka/PDF/report_18.pdf
- 8) Ministère de l'Éducation nationale, "Programme d'enseignement d'histoire-géographie-éducation civique pour les classes de sixième, de cinquième, de quatrième et de troisième du collège", Bulletin officiel spécial n° 6 du 28 août 2008,
(<http://www.education.gouv.fr/cid22116/mene0817481a.html>)
- 9) Ministère de l'Éducation nationale, "Programme d'enseignement d'histoire-géographie en classe de seconde générale et technologique", Bulletin officiel spécial n° 4 du 29 avril 2010,
(<http://www.education.gouv.fr/cid51320/mene1007258a.html>)
- 10) Ministère de l'Éducation nationale, "Programme d'enseignement commun d'histoire-géographie en classe de première des séries générales", Bulletin officiel spécial n° 9 du 30 septembre 2010,
(<http://www.education.gouv.fr/cid53319/mene1019675a.html>)
- 11) Ministère de l'Éducation nationale, "Classes de terminale des séries économique et sociale (ES) et littéraire (L) / Programme d'enseignement de l'histoire-géographie", Bulletin officiel n° 42 du 14 novembre 2013,
(http://cache.media.education.gouv.fr/file/42/58/3/4865_annexe1_280583.pdf)
- 12) Ministère de l'Éducation nationale, "Cycle terminal de la série scientifique / Programme de l'enseignement d'histoire-géographie", Bulletin officiel n° 8 du 21 février 2013,
(http://www.education.gouv.fr/pid25535/bulletin_officiel.html?cid_bo=66879)
- 13) hachette-educationホームページ
(<http://www.hachette-education.com/>)
- 14) Vincent Adoumié, A Auger, Catherine Augeraud, Catherine Barichnikoff, Laurent Bonnet, Didier Doix, Dominique Fouchard, Kevin Labiausse, Philippe Lacombe, Nicolas Mialet, Vincent Pelloux, Christine Pouget, "Histoire Géographie 6e en 1 volume - Livre élève - Edition 2009", hachette-education, 29/04/2009
- 15) Vincent Adoumié, Romain Agnel, Antoine Auger, Catherine Barichnikoff, Laurent Bonnet, Didier Doix, Laurence Escarras, Dominique Fouchard, Kevin Labiausse, Christophe Meunier, Vincent Pelloux, Sophie Thomas, David Yendt, "Histoire Géographie 5e - Livre élève - Nouvelle édition 2010", hachette-education, 18/08/2010
- 16) Maryse Baudson, Cécile Boudes, Delphine Desbrosse, Jérémie Dupuy, Gilles Gauvin, Romain Gazeau, Caroline Golubic, Sandrine Lemaire, Christophe Lucas, Marion Mare, Catherine Miot, Maryse Pisano-Bolaers, Aude Velut, "Histoire-Géographie 4ème - Livre élève Grand format - Edition 2011", hachette-education, 27/04/2011
- 17) A Auger, L. Bonnet, Romain Agnel, Ö. Bardakçi, M. Baudson, L. Beaumont, V. Blua, C. Boudes, F. Bréant-Dardant, D. Desbrosse, L. Escarras, L. Jacquet, A. Loizeau, C. Lucas, M. Maré, J. Muniga, S. Thomas, M. Vinet, "Histoire-Géographie 3e - Livre élève Grand format - Edition 2012", hachette-education, 18/04/2012
- 18) Anne Gasnier, Fanny Maillou-Viel, Valérie Bodineau, Carole Davrou, Stéphanie Fayolle, Thomas Gangneux, Christian Grataloup, Julien Picollier, Philippe Rekacewicz, Emmanuelle Ruiz, Estelle Uginet, "Géographie 2de grand format - Edition 2014", hachette-education, 30/04/2014
- 19) Alban Bervas, Dominique Husken, Dominique Andrieu, Laurent Cailly, Laurence Causse, Sylvia Delannoy, Nicolas Demonfort, Célia Drouault, Thierry Farcy, Anne Gasnier, Stéphane Genet, Christian Huetz de Lemps, Clotilde Jullian, Guilhem Labinal, "Géographie 1re S - livre de l'élève format compact - édition 2013", hachette-education, 04/09/2013
- 20) Vincent Adoumié, Dominique Fouchard, Dominique Husken-Ulbrich, Anne Gasnier, Fanny Maillou-Viel, Géraldine Ancel-Gery, Christian Bardot, Catherine Barichnikoff, Fabien Benezech, Alban Bervas, Valérie Bodineau, Pascal Boniface, Nuhedy

- Czubowski, "Histoire-Géographie Terminale S format compact - Edition 2014", hachette-education, 30/04/2014
- 21) 荒又美陽、『<世界の教科書>フランスの地理教科書』、高等学校地理・地図資料2007年2月号、帝国書院
- 22) 生田清人、『フランスの地歴教師と学校教育「地理」を語りあう』、地理2014年2月号（第59巻2号）、古今書院
- 23) 班目文雄、「フランスにおける地理・歴史教育」、海外の教育第241号、平成13年10月15日、全国海外教育事情研究会
- 24) ブリジット・シュバリエ、ジャクリーヌ・ジャルタ、ジャンミシェル・ランバン、パスカル・オジエ、ブリジット・ヴェロンラモト、「フランス人地歴教師日本視察報告書（2001年4月）」、海外の教育第241号、平成13年10月15日、全国海外教育事情研究会
- 25) 班目文雄、「フランス地理教育に何を学ぶべきであるか?」、海外の教育第250号、平成15年4月15日、全国海外教育事情研究会
- 26) アルマン・フレモン、『フランスの地理』、2001年1月、在日フランス大使館ホームページ
(<http://www.ambafrance-jp.org/IMG/pdf/Geographie.pdf>)
- 27) グザヴィエ・ド・プラノール（著）、手塚 章・三木 一彦（訳）、『フランス文化の歴史地理学』、二宮書店、2005年12月
- 28) アレクシス・ド・トクヴィル／著、井伊玄太郎／訳、『アンシャン・レジームと革命』、講談社、1997年1月

本稿は、執筆者個人の見解をもとにまとめられたものであり、所属機関の公式見解を示すものではありません。

森田康夫

現職：国土交通省 国土技術政策総合研究所
建設マネジメント技術研究室 室長